

令和7年度 一般入学試験問題

国語

注意事項

- 1 問題は1ページから17ページまであります。
- 2 試験時間は50分です。
- 3 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子を開いてはいけません。
- 4 試験開始後、この問題冊子のページ不足・印刷の不鮮明などの不備に気づいた場合は、監督者に申し出てください。
- 5 解答はすべて解答用紙に記入してください。
※字数制限のあるもので、句読点などが必要な場合は、すべて字数に含みます。
- 6 解答用紙には、出身中学校名、受験番号、氏名を必ず記入してください。

自由ヶ丘高等学校

一
次の文章を読んで、後の各問に答えよ。

「バカの問題は自分がバカであることに気づかないことだ。なぜならバカだから」というのがダニング＝クルーガー効果だ。1999年にこの研究が発表され大きな評判を呼んだのは、誰もが漠然と感じていたことを実験によって証明したからだろう。その後も[※]デビッド・ダニングは研究を続け、知と無知には三つのパターンがあると主張した。

一つめは、「知っていることを知っていること」。足し算の規則を知っているなら、自分が「 $5+3=8$ 」と計算できることを知っている。

二つめは、「知らないことを知っていること」。私はパソコンがどのようなプログラムで動いているのか知らないが、自分が無知なことは知っている。パソコンが故障したら自分で修理しようなどとはせず、サポートセンターに電話するだろう。

科学やテクノロジーが急速に発達したことで、わたしたちは「知らないこと」のなかで暮らすようになった。スマホでなぜメールが送れるかも、口座のお金がどうやって海外に送金できるのかも、正確に説明できるひとはほとんどいないだろうが、それでも日々を大過なく過ごしているのは、知らないことを他者（専門家）に[※]アウトソースしているからだ。

三つめは、「知らないことを知らないこと」。これがダニング＝クルーガー効果で、「二重の無知」あるいは「二重の呪い」と呼ばれる。知らないことを知らなければ対処のしようがないからだ。

ダニングは指摘していないが、「知っていることを知らない」という四つめのパターンもありそうだ。これは「直観」とか「暗黙知」と呼ばれている。

近年の脳科学は、無意識はときに意識（理性）より高い知能をもっていることを明らかにした。テーブルの上に二つのカードの山があり、一方は賞金も大きいが損する額も大きい（ハイリスク・ハイリターンで長期的には損をする）、もう一方は賞金も損失も小さい（ローリスク・ローリターンで長期的には得をする）ようにすると、意識がどちらの山が有利か気づく前に、危険なカードに手を伸ばしたときに指先の発汗量が増える。この「嫌な予感（無意識の知能）」によって、なぜかわからないまま正しい選択ができるのだ。

この四つめのパターンは、芸術家によくあてはまる。モーツァルトに「なぜこの旋律を思いついたのか」と訊いても、理路整然と説明することはできなかっただろう。音楽家だけでなく、画家や詩人、歌手や俳優、あるいはスポーツ選手も、なぜ自分が「できる」かを「知らない」のではないか。ひとびとが感動するような素晴らしいものは暗黙知から生まれるのだ。

ダニングクルーガー効果は、従来の教育に重大な疑問を突きつける。これまで学校では、子どもに知識を教えれば自然に学力は伸びていくとされていた。《1》

世界じゅうどの教師も、授業を理解できたかテストして、その結果を生徒にフィードバックしている。《2》こうした生徒は、自分がなにを知らないかを知っているので、間違ったところを修正して正しい知識に到達できる。

ところが認知能力の低い子どもは、なにを知らないかを知らないので、フィードバックを受け取ってもどうしていいのかわからない。どこでなぜ間違えたのかを理解できない子どもが（たくさん）いることは、教育者ならみんな知っているだろう。

間違いがつねに無知からもたらされるともいえない。《3》「53÷37」を16ではなく24と答える子どもがいる。これは「大きい数から小さい数を引く」という規則に、それぞれの桁で従っているのだ。

このケースでは、子どもは誤ったルールで「正しく」問題を解いている。《4》計算の前提が間違っていることに気づかなければ、繰り下がりのある引き算はすべて不正解になるが、「57÷34」のような引き算は正解できるから、なぜうまくできないのかを知るのは難しいのかもしれない。

ここから、幼児期はさほど差がなかったのに、小学校高学年になる頃には学力に大きな差がつくことを説明できるだろう。《5》認知能力の高い子どもがフィードバックを受けて学力を高めていくのに対し、認知能力が低い子どもは、授業内容が難しくなるにつれて脱落してしまうのだ。

あらゆる分野でダニングクルーガー効果が同じ影響を及ぼすわけではない。

自分でバスケットボールのフリースローをすることと、選手のフリースローの能力を評価することはちがうが、どの選手が上手いかはある程度わかるだろう。

実力と自信が完全に一致する場合の相関関係は1、まったく一致しないと0になる。相関関係が1だと、他人に対する「こうすればいいのに」というアドバイスを、自分でも完璧に行なうことができる。逆に相関関係が0だと、自分はなにひとつ満足にできないのに、他人を批判することだけに長^たけている（かなりイヤな奴^{やつ}だ）。

スポーツの場合、他者のパフォーマンスへの評価と本人の成績との相関関係は0・47前後になるが、この相関関係は、技術知識で0・33、面接能力で0・28、一般的な機械知識で0・2、医療関係の技術と対人能力で0・17と下がっていく。管理能力にいたっては0・04で、他人に対する評価と自分の実力がほとんど一致しない。

これは、スポーツと事務系・技術系の仕事のちがいというわけではないだろう。プロのサッカーチームの監督より自分の方が

有能だと思っているファンはいくらでもいる。

だとしたら、直感的に自分でもできそうだと思えるかどうかのちがいはないだろうか。バスケットボールのフリースローの成功率は体験的に知っているが、サッカーチームの監督がなにをしているのかはよくわからないので、自分でもできると思う。高度な外科手術は無理でも、問診や注射くらいならできそうに思えるのも同じだ。

そう考えれば、管理者の能力を正しく評価できないのも当然だろう。部下はみんな上司の仕事を低く評価し、自分の方がずっとうまくやれると思っているのだ。

ダニング＝クルーガー効果のもう一つの重要な発見は、認知能力の低い者が自分を過大評価する一方、認知能力の高い者が一貫して自分を過小評価していることだった。なぜこんなことになるかは、人類の進化の歴史から説明できるのではないか。

ヒトは旧石器時代から何百万年も、150人ほどの小さな共同体のなかで地位をめぐって争ってきた。評価の基準は時代や環境によって異なるだろうが、能力のある者が高い地位を獲得する原則は同じだったはずだ。だとしたら、自分に能力がないことを他者に知られるのは致命的だ。このようにして、能力を大幅に過大評価するようになった。

その一方で、すぐれた能力があることを他者に知られることもまたリスクだ。権力者が真つ先に排除しようとするのは、将来のライバルになりそうな有能な者だからだ。このようにして能力を過小評価し、共同体のなかで極端に目立つことを避けようとしたのではないだろうか。

ハリネズミのように自分を大きく見せるのも、能ある鷹が爪を隠す^{たか}のも、生き延びるために脳に埋め込まれた戦略なのかもしれない。

(橘 玲『バカと無知 人間、この不都合な生きもの』より)

- ※ デビッド・ダニング……アメリカの心理学者。ジャスティン・クルーガーと共にダニング＝クルーガー効果を提唱した。
- ※ アウトソース……業務の一部を外部に委託すること。

問一 本文中からは次の一文が抜けている。本文に入れるにはどこが最も適当か。本文中の《1》《5》のうちから一つ選び、番号で答えよ。

だがダニングによれば、この方法で学力を高められるのは認知能力の高い子どもだけだ。

問二 本文中の ダニングクルーガー効果 について、これの具体的行動として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 仕事で成功し、評価をしっかりと得られているのにも関わらず、役立たずの自分は評価に値しないと考えてしまうこと。
- 2 多くの人が持っているものは、きっといいものだろうと思い込んで、自分もそれを手に入れたと考えだすこと。
- 3 「興味のない人は見ないでください」などの言葉で行動を制限された方が、一層強い興味を対象に抱いてしまうこと。
- 4 まだ基礎の部分しか教えてもらっていないにも関わらず、十分習得したと思い込んで、それ以上学ぼうとしないこと。
- 5 開発途中のゲームの画面やアニメの次回予告など、すでに完成したものよりも未完成な状態のものに関心を持つこと。

問三 本文中の パソコンが故障したら自分で修理しようなどとはせず、サポートセンターに電話するだろう を文節に分けたときの数を、次の1～5のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 五文節
- 2 六文節
- 3 七文節
- 4 八文節
- 5 九文節

問四 本文中の 二重の呪い について、筆者がこのようにいうのはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 自分が「知らない」ことを自覚できないということは、それを改める機会を持つことがないということだから。
- 2 自分が「知らない」ことが世界には数多くあると知らないと、小さな世界の「常識」にとらわれてしまうから。
- 3 自分が「知らない」こともあるということを意識できないと、傲慢な自己を形成することになってしまうから。
- 4 自分が「知らない」ことに無頓着であるということは、自分の視野を自ら狭めてしまっていることになるから。
- 5 自分が「知らない」ことを学ぶ意欲がないということは、自己を向上させる意志を持たないということだから。

問五 本文中の 暗黙知 について、この言葉の本文中の意味として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 いつの間にか知っている、常識では認められない知識の体系。
- 2 言語化されていないために、知識としては蓄積されない^{ひらめ}閃き。
- 3 皆が知っているのに、口に出して言うことがない共通の認識。
- 4 言葉で他者に説明はできないが、意識をしている社会の規範。
- 5 知らず知らずのうちに身についている、感覚的な知性の領域。

二

次の各問に答えよ。

問一 次の傍線部の漢字の読みを、ひらがなで書け。

文化祭の経験が、現在の彼我の関係の礎となっている。

問二 次の傍線部に適当な漢字をあて、楷書^{かいしよ}で書け。

ぜに勘定をして、すいとう帳に記録する。

三

高校二年生の丹羽要は「日本情報オリンピック」での入賞を目指して、学校のコンピュータ準備室でプログラミングの勉強に励んでいる。この準備室を、同じ高校の定時制に通う柳田岳人が科学部の「火星の環境を再現する実験」に使わせてほしいと頼み込んできて、要は激しく抵抗している。以下の文は、再度準備室の使用を懇願された要が、岳人と二人で学校へ戻る場面である。これを読んで、後の各問に答えよ。

ゆるやかな坂道を、岳人と並んで学校へ向かう。

土下座をやめさせるにはこうするしかなかった。なりふり構わぬ岳人のあの訴え方は、はっきり言って卑怯だ。ひきよう卑怯なだけあって、良くも悪くも心は動く。

道すがら、岳人は自身のことを少しづつ話した。中学校にもろくに通わず、悪さばかりしてきたこと。昼間はリサイクル関係の会社でゴミ処理の仕事をしていること。夕方四時から部活に出るために、職場に頼み込んで出勤を早出に変えてもらったことなどだ。

「一つ訊いていいですか」要は言った。「あの藤竹って先生は、何者なんですか」

「な、教師っぽくねーよな」岳人はこちらの言いたいことをすぐに察した。「教師を始めたのはわりと最近で、それまでは大学に勤めてたらしい。地球とか惑星の研究」

「研究者くずれてやつですか」

「くずれ？ どういう意味よ」

「まあ……元研究者、ぐらいのことですよ。もうちょい悪い意味で」

「あの人、元じゃないぜ。給料とかはもらってないらしいけど、今も大学に籍はあって、出勤の時間まで毎日そこで研究してるから」

「じゃあ、本当にやりたいのは研究で、定時制の教師は仕事として割り切ってやってるってことですか」

「割り切って？」岳人が首を横に振る。「あの人に一番ふさわしくねえ言葉だな。だって、部活やってるとき、俺たち以上に楽しそうなんだぜ？」

「———そうですか」やっぱり、よくわからない人だ。

「謎は多いけど、俺は信頼してる」

「信頼、できますかね」

「向こうはこっちを信頼してくれてるからな。ま、結局はエリートだし、ただの世間知らずって説もあるけど」岳人は一人で笑った。「最初はあのスカした態度にムカついて、ぶん殴ってやろうかと思ったけどな」

そのとき、けたたましい排気音とともに、坂の上から一台の原付バイクが走ってきた。ノーヘルの若い男たちが二人乗りをしている。通り過ぎるかと思ったら、こちらに気づいてスピードを落とす。

知り合いらしく、岳人が舌打ちをしてつぶやいた。「こんなときに、三浦かよ」

原付バイクは真横で止まった。ハンドルを握る男が、細く剃った眉を上げてにやける。

「誰かと思ったら、ガックンじゃん。ちよー久々」

※「アンニョン」坊主頭を赤く染めた後ろの男が、手を上げる。

「よう、朴」岳人もそれに応じた。

三浦という男が、視線をこちらに向けた。何を言われるのかと身構えていると、嘲るように口の端を歪める。

「しばらく見ないうちに、ツレも変わっちゃったねえ。君、大丈夫？ このお兄さんに、カツアゲとかされてない？」

まともに答えていいものかもわからず、どぎまぎしながら「いや……」とかぶりを振った。

「いいから、さっさと行けよ」岳人がため息まじりに言う。「俺たち、時間ねーんだ」

「学校行くの？ 今頃から授業出んのかよ」

「授業じゃねえ。実験だよ」

「実験？ 前もそんなこと言ってたよな。どうしちゃったのよ、マジメっ子になっちゃって」へらへらしていた三浦が、急に目つきを変える。「いつまでもガラにもねえことやってんじゃねーよ」

「黙れ。お前にや関係ねえ」

「んだとコラ」

いきり立ってシートを降りようとした三浦の肩を、朴が後ろから押さえる。

「やめとけって」朴は真顔のまま、岳人のほうへ軽くあごをしゃくった。「ちげーんだよ、こいつはもう」

その言葉に、三浦の表情が醜く歪む。わずかに細めた暗い目に満ちているのは、憎悪にも苦痛にも見えた。

早く行け、と朴がこちらに目配せした。黙って歩き始めた岳人に、慌ててついていく。後ろで三浦が「ムカつくんだよ！」と

わめく声が、どこか子どもっぽく聞こえた。

びくびくしながら振り向かずにはばらく行くと、原付がまた排気音を響かせ始めた。それが明治通りのほうへ遠ざかっていくのを聞いて、やっと胸の鼓動が静まってくる。

「悪かったな」何事もなかったかのように歩を進めていた岳人が、ぼそりと言った。「あいつら、うちの定時制にいたことあんだよ。半年ももたなかったけど」

「ああ、そうなんですか」

「ま、いろんなやつが入ってくるからな。定時制には」

この岳人は明らかに、自分よりいくつか年上だ。彼もまた、ほとんどの人が当たり前に進む道を一度は大きく外れながら、再び学校という場所に戻ってきたのだろう。そう思うと、ふと訊いてみたくなった。

「人を殴るって、どんな感じですか」

「え、殴ったことねーの？」

「あるわけないでしょ」ブレザーの袖をまくって細い腕を見せる。

「ああ……パソコンやるので精一杯だな、そりゃ」

「変なこと訊きますけど」思い切って言ってみる。「家族を殴ったこと、ありますか」

「ねーよ」岳人は即答した。「親父の胸ぐらをつかんだことは何回もあるけど、殴ってはない。その代わり、壁ぶん殴って穴あけて、ドアも蹴ってぶっ壊した」

「殴る代わりに、ですか」

「俺に限らず、親を殴るなんて、そう簡単にできるもんじゃ^エないと思うぜ。そんなことしたらたぶん、相手だけじゃなく、自分まで壊れちまう。自分を守るためにも、代わりに物をぶっ壊すんだよ」

最後の言葉に、自分でもたじろぐほど胸を締めつけられた。

弟の衛も、母親に直接暴力を振るったことは一度もない。要にもだ。家の中をめっちゃめっちゃに壊すのは、誰かを傷つけないからではなく、むしろその逆ということか。

衛はもともと要と正反対で、運動が得意で友だちの多いやつだった。それなのになぜか、鉄道とパソコンに詳しいだけの要を無条件に尊敬していた。「俺の兄ちゃん、ゲームが作れるんだぞ」と同級生たちによく自慢していた。兄ちゃんはカッコいい。

そんなことを言ってくれたのは、この世で衛だけだ。

だから、弟のことは憎み切れなかった。あいつのせいで、高校受験に失敗した。あいつのせいで、平穏な生活も大事なパソコンも失った。そんな思いで頭も心もがんじがらめになり、息さえうまくできなくなることはもちろんある。けれど衛は、たった一人の弟だった。

衛は苦しんでいる。必死で自分の心を守ろうとしている。本当はそんなこと、初めから知っていたのだ。それなのに、もがき喘ぐ^{あえ}弟から目を背け続けていた。

僕が本当に憎んでいるのは――何もできない^オ僕だ。

いつの間にか正門をくぐっていた。こんな時間に校内に入るのは初めてだ。

窓に明かりが灯^{とも}っているのは、右手に見える校舎の三階だけ。定時制は今、四限目の授業中だそうだ。教師か守衛^{とが}にもし見咎められたら、忘れ物を取りにくたとしても言えがいい。

「せっかくだし、ちよつくら授業見てくか？」岳人が言った。

「は？ いや、それはさすがに……」

「廊下から一瞬のぞくだけだって。定時制の教師は、生徒がぶらついてても気にしねえから、これ着てりゃいける」

岳人が例の作業着をつかませてくる。仕方なくブレザーを脱いでかばんに突っ込み、作業着の上着だけ羽織った。ひどくたばこ臭い。

岳人に続いて足を踏み入れた校舎一階は、しんと静まり返っていた。扉に光が見えるのは、職員室と保健室だけ。階段で三階まで上がると、教室の明かりが廊下を照らし、教師の声がかすかに漏れ聞こえてくる。

定時制一年が使っている二年一組の教室の横をさりげなく通り過ぎ、二組の後ろの引き戸に二人で体をぴたりと寄せる。首をのばして窓から中をのぞいた。

季節はずれのアロハシャツを着た教師が、黒板に英文を書いている。英語の授業らしい。教卓のすぐ前で熱心にノートをとっている背中[※]は、長嶺か。同じく最前列に座るアンジェラは、時どき後ろに首を回しては口を開き、楽しそうに笑っている。

教室の中ほどには要と同年代のおとなしそうな生徒たちがばらばらと座り、最後列にはネイルをいじる派手な女生徒の姿が見えた。

真面目に授業を聞いている者もいれば、ただぼんやり座っている者も、こっそりスマホを見ている者もいる。そこは自分たち

と大して変わらない。教師は身振りをまじえて熱心に教え、冗談らしきものも飛ばす。生徒たちは全員でないにせよ、それにちやんと反応する。

年齢や服装はまちまちだし、緊張感のようなものはない。それでも、要が思っていたよりもずっと教室らしい教室が、そこにはあった。

二、三分様子を観察したあと、こっそりその場を離れて隣の校舎の物理準備室へと向かう。暗い渡り廊下を進みながら、要は言った。

「今つて、通信制の高校とかもいっぱいあるじゃないですか。なんでわざわざ定時制を選ぶんですかね」

「単純に、来てえからじゃね？ 学校に」

「行きたくても行けなかった年配の人ならわかりますけど、僕らぐらいの歳の子は——」中学で不登校だったケースも多いはずだ。

「いい思い出なんか一個もなくとも、引きこもってた時期があったとしてもさ、学校に行きたいって気持ちはきつと、なかなかゼロにはなんねーんだよ」岳人は前を見つめたまま言った。「不思議なところだよな、学校って」

衛の中にも、そんな気持ちかわずかでもまだ残っているだろうか。さっき見た教室の光景を思い出しながら、残っていてほしいと心から願った。

※ アンニョン……挨拶の言葉。

※ 長嶺……科学部の一員。

※ アンジェラ……科学部の一員。

(伊与原 新『宙わたる教室』より)

問一 本文中の 卑怯だ について、そう感じるのはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 興味を惹きつけて自分から協力しようと思わせるやり方だから。
- 2 個人の都合を考慮せず強引に納得させようとするやり方だから。
- 3 周囲の無関係な人を巻き込んで暗に非難してくるやり方だから。
- 4 苦勞を訴えて頼みを無下にはできないと思わせるやり方だから。
- 5 真剣に対応せずにいると罪悪感が生まれてしまうやり方だから。

問二 本文中の あの藤竹って先生は、何者なんですか について、要と岳人は「藤竹」のことをどんな人物だと捉えているか。それぞれを説明したものとして最も適当なものを、次の1〜5のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 要は、藤竹のことを、エリート然としているにもかかわらず悪さばかりしていた岳人を心酔させている油断ならない人物だと感じているが、岳人は、藤竹のことを、最近教師になったばかりなので仕事よりも自分の研究を優先してしまう教師らしくない人物だと感じている。

2 要は、藤竹のことを、研究者としての道に見切りをつけて生徒と部活動に勤^{いそ}しみながら高校教師の仕事に新たな喜びを見出した意欲的な人物だと感じているが、岳人は、藤竹のことを、学問や研究の世界しか知らない世間知らずのエリートで自分とは住む世界が違うと感じている。

3 要は、藤竹のことを、研究者として大成したかったのに不本意ながら断念して高校教師になった、熱意に欠ける教師らしくない人物だと感じているが、岳人は、藤竹のことを、地球や惑星の研究に没頭するあまり高校教師としての仕事を疎かにしがちな教師らしくない人物だと感じている。

4 要は、藤竹のことを、研究を続けたかったのか高校教師の仕事をやったのか判然としない得体の知れない人物だと感じているが、岳人は、藤竹のことを、自分の興味関心に忠実で、これまでに出会った教師とは違って科学に取り組む自分のことを信頼してくれる人物だと感じている。

5 要は、藤竹のことを、専門性を発揮するような研究者としてのやりがいは見出せない職場でも楽しく働く謎の多い人物だと感じているが、岳人は、藤竹のことを、科学の面白さを生徒に伝えるためならば自分の研究やそれに没頭する時間を容易^{たやす}く犠牲にするような人物だと感じている。

問三 本文中の ちげーんだよ、こいつはもう について、ここから読み取れる朴の気持ちはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の1〜5のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 自分や三浦と同じように悪さをしていた岳人の態度が変化しているの、それを邪魔してはいけなさと感じている。
- 2 自分や三浦と行動を共にしていた岳人が変化するのを許せなくて、もう仲間でもないから排除したいと感じている。
- 3 自分や三浦と仲間意識を持っていたはずの岳人が変化したので、取り残されたくない焦りが募るのを感じている。
- 4 自分や三浦と悪さをしていた岳人の友人の質の変化を目の当たりにして、見捨てられたような寂しさを感じている。
- 5 自分や三浦と不真面目な生活をしていた岳人が変化したので、前向きになれない自分と比べて羨ましく感じている。

問四 本文中の どこか子どもっぽく聞こえた について、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 岳人との会話から、相手のことを思いやる子どものような三浦の一途さを感じたから。
- 2 三浦の発言を聞いて、内容的にも言葉遣いにも知性を感じられないと思ったから。
- 3 岳人の言動に表情をめぐりしく変える三浦の姿に、一面的な単純さを感じたから。
- 4 三浦の発言を聞いて、岳人とまだ仲良くしたいと思っているのだと呆れたから。
- 5 岳人の変化を受け入れられないでいる三浦の姿に、屈折した心の狭さを感じたから。

問五 本文中の 再び学校という場所に戻ってきた について、岳人は学校に戻ってくる理由をどのように捉えているのか。本文中から一文で抜き出し、はじめの五字で答えよ。

問六 本文中の波線部 ア／イ・オ・カ の ない について、これを文法的なはたらきで分類したものとして最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- | | | | | | |
|---|-------------|---|-------------|---|-------------|
| 1 | ア・ウ・エ／イ・オ・カ | 2 | ア・エ・カ／イ・ウ・オ | 3 | ア・イ・カ／ウ・エ・オ |
| 4 | ア・エ・オ／イ・ウ・カ | 5 | ア・ウ・オ／イ・エ・カ | | |

問七 本文中の 家の中をめちやめちやに壊す について、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 取り返しがつかない状況に自分で自分を追い込むことになるのを、無意識のうちに避けているから。
- 2 暴力により怪我をさせるかもしれない、自分が一方的に悪者になり責められることになる嫌だから。
- 3 辛い気持ちを素直に訴えられないので、母に迷惑を掛ける形でしか自己の存在を主張できないから。
- 4 ものを壊すことで、自分を認めてくれていた要に恨まれているという現実から目を逸らしたいから。
- 5 家族から激しく恨まれるようになると家庭での居場所を失うことになってしまうと恐れているから。

問八 本文中の 残っていてほしいと心から願った について、このように考えるようになったきっかけは何か。その説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 弟の引きこもりや暴力の原因が、自分にあるのではないかという不安から解放されたこと。
- 2 最近では迷惑を掛ける存在としか感じていなかった弟との懐かしい記憶を思い出したこと。
- 3 不本意な現状をただ弟のせいにすることで、問題から目を逸らしていたのに気づいたこと。
- 4 弟の問題について、自分に落ち度がないため寄り添うのを避けていたのだと反省したこと。
- 5 岳人と弟の共通点を見出し、弟にも岳人のように前向きになってほしいと強く思ったこと。

問九 本文の表現の特徴を説明したものとして最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 過去の仲間から離れて前向きになった岳人とかかわっていく中で、それとは対照的に過去には明るく友達が多かった弟のことを要に回想させることで、要自身の人間関係の築き方やそれを発展させていく方法が象徴的に描き出されている。
- 2 岳人の発言は「ねーよな」「してっから」のようなくだけた口語体で書かれる一方、要の発言は「いいですか」「できませんかね」のような丁寧語を多用して書かれており、二人の性格や他者との接し方の違いが効果的に表現されている。
- 3 三浦は「口の端を歪める」「目つきを変える」などの身体部位を使った表現を用いて感情豊かに描かれる一方、岳人は「黙って歩き始めた」「ぼそりと言った」のように感情を言葉にすることの少ない冷静な人物として描かれている。
- 4 岳人の要に対する口調と、三浦や朴に対する口調とを対比的に表現することで、岳人を取り巻く人間関係が変化していることがわかる一方、要の発言には「……」や「——」を多用して、自分に自信の無い弱気な性格を描き出している。
- 5 先生や仲間恵まれながら「火星の環境を再現する実験」に取り組む岳人に対し、家族の悩みを抱える上に、一人で取り組む「日本情報オリンピック」への出場を目指した勉強にしか情熱を持たない要の孤独が際立つよう描写されている。

四

次の文章を読んで、後の各問に答えよ。

大和国に竜門といふ所に、[※]聖ありけり。住みける所を名にて、竜門の聖とぞ言ひける。その聖の親しく知りたりける男の、明け暮れ鹿を殺しけるに、[※]照射といふことをしけるころ、いみじう暗かりける夜、照射に出でにけり。

鹿を求めありくほどに、目を合はせたりければ、「鹿ありけり」とて、[※]押し回し押し回しするに、確かに目を合はせたり。[※]矢比に回し取りて、[※]火串に引きかけて、矢をはげて射むとて、弓振り立て見るに、この鹿の目の間の、例の鹿の目のあはひよりも近くて、目の色も変はりたりければ、あやしと思ひて、弓を引きさしてよく見けるに、[※]なほあやしかりければ、矢をはづして、火取りて見るに、[※]鹿の目にはあらぬなりけりと見て、起きば起きよと思ひて、近く回し寄せて見れば、身は[※]一^{いち}張^{ちやう}の皮にてあり。「なほ鹿なり」とて、また射むとするに、なほ目のあらざりければ、ただうちにうち寄せて見るに、法師の頭に見なしつ。こはいかにと見て、おり走りて火うち吹きて、[※]しひをりとて見れば、この聖、目うちたたきて、鹿の皮を引きかづきて添^ふひ臥したまへり。

「こはいかに、かくてはおはしますぞ」と言へば、[※]ほろほろと泣きて、わぬしが制することを聞かず、いたくこの鹿を殺す。我鹿に代はりて殺されなば、さりともしはとどまりなんと思へば、かくて射られんとして居るなり。口惜しう射ざりつとのたまふに、この男、ふしまろび泣きて、「かくまでおぼしけることを、あながちにしはべりけること」とて、そこに、刀を抜き、弓たち切り、[※]胡^{やなぐ}繖^ひ皆折り砕きて、[※]髻^{ももしり}切りて、やがて聖に具して法師になりて、聖のおはしけるが限り、聖に使はれて、聖失せたまひければ、またそこにぞおこなひてゐたりけるとなん。

（『宇治拾遺物語』より）

問四 本文中の 鹿の皮を引きかづきて添ひ臥したまへり について、このような行動をとった理由として、最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- | | |
|--------------------------|---------------------------|
| 1 意図的に自分が目立つことで男に射させるため。 | 2 理解不能な行動を起こして男に恐怖を与えるため。 |
| 3 松明の火を明るくすることで男に射させるため。 | 4 鹿を皮だけにして男に罪の意識を植え付けるため。 |
| 5 男に自分を射させて罪の意識を植え付けるため。 | |

問五 本文中の こはいかに、かくてはおはしますぞ について、この発言にはどのような気持ちが込められているか。最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- | | | | | |
|------|------|------|------|------|
| 1 悲哀 | 2 憤慨 | 3 落胆 | 4 困惑 | 5 後悔 |
|------|------|------|------|------|

問六 本文中の ほろほろと泣きて について、この部分の主語を本文中のこの段落以外から漢字一字で抜き出して答えよ。

問七 本文中の 法師になりて について、なぜこのようにしたのか。最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 誤射してしまった聖の世話をしているうちに、自分が聖に成り代わりたいと思い始めたから。
- 2 死んだ聖に代わって仏道修行をするうちに、人々に法師として崇め^{あが}られるようになったから。
- 3 自分の身を犠牲にしてまで殺生をいさめようとしてくれた聖に感動し、自身の行いを悔いたから。
- 4 生き物の命を大切にする聖が法師になったのを見て、自分も徳を積んで法師になりたいと思ったから。
- 5 今までに狩ってきた鹿たちを全て聖に差し出していたら、その行動がついに認められたから。

問八 本文の最終段落には、会話文として「」に入れるべき部分がもう一か所ある。その部分を探し、はじめの三字で答えよ。